

## 10 『房事養生鑑』に描かれている女性生殖器について

ヴィグル・マティアス

二松学舎大学

江戸時代になると、新たな医学的知識を書物から得られるようになった。17世紀から商業出版の発展により、本格的に出版文化は普及したに伴い、医学関係の書物が当時の人にとって身近なものとなった。さまざまな身分の読者の需要に対象したさまざまな種類の医学書物が出版された。出版物が盛んになっても、写本という形で流通した医学書も少なくなかった。そして、平安時代の『医心方』、鎌倉時代の梶原性全『頼医抄』など、江戸時代以前の医学書のなかには図の要素が散発的に出現したが、ほとんどの書物は文字を主体とした。しかし、17世紀後半から、経絡のルート、ツボの位置、腹診・舌診、臓腑の位置、針灸用道具などについての図はしばしば使用され、自由自在な形で文字と図を組み合わせた書物に入れるような時代になった。このような医学書の図像化は漢方医学書に限らず、1774年に「解体新書」が出版された後にオランダ医学に関する書物についても規範的になったとも言えるだろう。もちろん、自ずからの学派内で伝承されてきた知識を他の学派に属する医師に教え、本に書き表してはならないなどという秘伝主義的なものも幕末までに続いたが、この考えは医学知識を公共の世界に普及するという啓蒙的な考えと共存した。

管見では、江戸時代の医学における図の役割を作者、あるいは読者の視点から検討する研究がない。しかし、当時の身体とテキストとイメージのあるべき関係を理解するため重要な問題である。欧米の近世自然科学史・技術史・医学史の分野では、非テキスト的且つ視覚的な要素でありながら、パラテキストとしてイラストレーションがテキストの解釈に大いに影響したり、観察された植物・身体内・技術などを表現するイラストレーションの役割と特徴などを論じる研究が多い。例えば、近世医学については、アンドレアス・ヴェサリウスの『人体の構造』(1642年出版)などに見える言葉と図像の相互的な依存がすでに明らかになっている。また、ルネサンス後期から、ヨーロッパ社会における技術の普及を促進するには、模式図・挿絵・グラフのついた技術書の出版が重要な役割を果たしたということが過去からよく知られている。漢方医学の場合も文字だけで伝えにくい臨床知識・暗黙知識も存在するので、医学書にはイラストレーションが飾りとして単に添えられたものではなく、医学書の本質的な要素として専門的な知識を伝えようとしたのではないかと考えられる。また、イラストレーションに表すことによって、言葉だけでイメージしにくいことを大体の理解を得ることができるという役割があると考えられる。

論点は、イラストレーションのついた医学書・巻物を作成した当時の医師はどのような表現を目的としているのだろうか、イラストレーションに何を期待したのであろうか。また、読者はどのようにイラストレーションを実際に理解し、利用したのであろうか。関係性をつけながら、文字とイラストレーションを読んだのだろうか。女性特有の体内が描かれている『房事養生鑑』を取り上げながら、このような医学関係のイラストレーションをめぐる諸問題について報告する。